

## 2. 大和の宝篋印塔に関する基礎的整理－鎌倉～南北朝期の様相－

### はじめに

本書で報告する額安寺宝篋印塔は、中世大和のみならず我が国石造文化史に重要な位置を占める遺物である。その概要および歴史的位置付けについては報文および他執筆者による考察において、余すところなく述べられている。本稿では額安寺宝篋印塔を含めた、鎌倉～南北朝期における大和の宝篋印塔のありようを整理、その動態についての基礎的整理を試み、大和の中世社会を石造物から考えるための基礎研究としたい。

#### (1)基礎資料

京都・大和は石造物の中心地とも考えられている。しかしながら、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔はそう多くはない。まず、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔を表1・2にまとめた。年代決定の根拠は記年銘資料および記年銘資料との類似性、先行研究（川勝1966,1978、清水1984ほか）により抽出したもので、多少の不安定要素も含んでいる。おおむね残欠も含め63例を抽出した。この他、先行研究がない残欠で年代決定に不安のあるものや、県外出品などは抽出していない。

宝篋印塔の分布は図1のとおり、奈良盆地内、生駒谷、東山中、吉野方面とほぼ満遍なく分布しているが、奈良盆地東南部・葛城山麓には空白が見られる。

#### (2)宝篋印塔の諸属性

大和における宝篋印塔の特徴としては、これまで基礎素面のものが多い点などが指摘されてきた（清水1984）。岡本智子は西日本の宝篋印塔を分類、その展開を考察する中で、大和においては「基礎が無地で高く、笠の高さに対して隅飾が低い」もの（氏のEタイプ）が主流で、生駒市興山往生院塔がその最古のものであると指摘した（岡本2006）。岡本の指摘はそれまで漠然と述べられてきた宝篋印塔の地域性を、考古学的に型式分類した点で画期的なものであったが、無記年銘資料や残欠を対象に含めると、大和国内においても様々なバリエーションがあり、これらを視野においてより詳細な類型設定が求められよう。本章以下ではこうした現状をもとに、下記の視点から類型の再設定を行い、あわせて分布傾向を確認する。

#### 隅飾の形状による分類

宝篋印塔の型式分類に、隅飾の形態分類が有効である点は、これまで指摘されている通りであり、先行研究では主に笠の高さに対するその比率に注目してきた（田岡1960、岡本2006）。しかし実資料の観察において「隅飾の大きさ」という要素を数値化するには、笠の幅に対する隅飾の幅も加味せねばならない。そこで、「隅飾の高さ ÷ 隅飾基底幅」（高さ指数と呼称）を縦軸に、笠幅に対する隅飾の占有率（隅飾占有率と呼称）を横軸に設定し、計測できた39基の法量分布を示した（図2・3）<sup>1</sup>。これを見ると隅飾の形態は大きく3群に分かれることがわかる。

1群は高さ指数が1.4～1.6で、隅飾占有率が30～50%を占めるものである。

2群は高さ指数が1～1.3で、隅飾占有率が50%以下のものである。奈良市正暦寺塔5（14）、奈良市南明寺塔（16）は30%前後と著しく小さい<sup>2</sup>。こうしたものについては、今後別類型で捉える必要があると考えるが、資料数の少ない現段階では、とりあえずの措置として2群に編入しておく。

番号	所在地	西暦	銘文	石材	備考
1	奈良市鳴川町 德融寺1			花崗岩	藤原豊成塔
2	奈良市鳴川町 德融寺2			花崗岩	藤原豊成塔の部材
3	奈良市西新屋町 小塔院			花崗岩	
4	奈良市川上町 三笠靈園1			花崗岩	4と組み合う？
5	奈良市川上町 三笠靈園2			花崗岩	3段笠下と軒の部分
6	奈良市川上町 三笠靈園3			花崗岩	5と組み合う？
7	奈良市川上町 三笠靈園4			花崗岩	1と組み合う？
8	奈良市川上町 三笠靈園5			花崗岩	3と組み合う？
9	奈良市二名町 杵築神社			花崗岩	塔身のみ
10	奈良市五条町 唐招提寺	1263?		花崗岩	開山塔
11	奈良市菩提山町 正暦寺1 (中央塔)			花崗岩	基礎および露盤2区格狭間
12	奈良市菩提山町 正暦寺2 (東塔)			花崗岩	台座3区格狭間
13	奈良市菩提山町 正暦寺3 (西塔)			花崗岩	台座3区格狭間
14	奈良市菩提山町 正暦寺5 (部材)			花崗岩	笠の部材のみ
15	奈良市須川町 神宮寺			花崗岩	
16	奈良市阪原町南出 南明寺			花崗岩	基礎面積は地上露出部分で算出
17	奈良市長谷町 日吉神社			花崗岩	
18	山添村春日 不動院	1317	文保元丁巳二月日/願主聖禪等求/合力比 丘覺信/沙弥道教	花崗岩	岡本広義氏計測値を使用
19	山添村大塩 大塩墓地			花崗岩	相輪に水煙
20	奈良市小倉町 墓の山	1360	(聖)明神 石塔也 小藏庄 延文五庚子	花崗岩	
21	奈良市都祁村蘭生 青竜寺			花崗岩	露盤2区格狭間
22	奈良市登大路町 奈良国立博物館			花崗岩	福澤邦夫氏計測値を使用
23	奈良市魚屋町 某美大学生寮			花崗岩	
24	生駒市傍示町 西方寺			花崗岩	
25	生駒市俵口町南条			花崗岩	「如法經」の銘文、納入孔あり
26	生駒市有里町 円福寺北塔	1293	右志者/為自他滅罪/生善往生淨刹/七世 四恩法界衆生/平等利益/造立如件/永仁 元年壬辰十二月十六日/元祖口於□□□ □沙弥/□□□□尼淨阿弥陀仏/近真口	花崗岩	
27	生駒市有里町 円福寺南塔			花崗岩	
28	生駒市萩原町 奥山往生院	1259	南無□□/導師/弥勒仏/积迦入滅/一千八 百/六十七年/正元元年/十月日/勸進□□ /□□	花崗岩	
29	大和郡山市城内町 郡山城	1298	右為法界衆生皆成仏/永仁六年戊戌七月 十三日/勸進聖仙蓮/大施主一源入道/大 工橘友安	花崗岩	
30	大和郡山市城内町 郡山城天守台1			花崗岩	段形のみ存在
31	大和郡山市城内町 郡山城天守台2			花崗岩	段形のみ存在
32	大和郡山市額田部町 額安寺	1260	文応元年/十月十五日/願主永弘/大工大 藏/安清	花崗岩	
33	天理市上総町 王墓山東塔			花崗岩	岡本広義氏計測値を使用。塔身行方 不明
34	天理市上総町 王墓山西塔			凝灰岩	塔身行方不明
35	天理市杣之内町木堂 神縄池畔			花崗岩	現在基礎のみ
36	天理市稻葉町 三十八柱神社			花崗岩	露盤一石で成形
37	天理市柳本町 長岳寺大師堂東1			花崗岩	岡本広義氏計測値を使用
38	天理市柳本町 長岳寺境内1			花崗岩	塔身別個体
39	天理市柳本町 長岳寺境内2			花崗岩	塔身と基礎のみ
40	天理市柳本町 長岳寺墓地1			花崗岩	基礎と台座のみ
41	天理市柳本町 長岳寺墓地2			花崗岩	笠のみ
42	天理市柳本町 長岳寺墓地3			花崗岩	塔身別個体。
43	田原本町蔵堂 淨福寺			花崗岩	
44	田原本町薺王寺 蓮休寺			花崗岩	笠のみ。計測値は濱田・三木1990より
45	桜井市初瀬 長谷寺			花崗岩	対向孔雀文の基礎のみ
46	桜井市上之宮			花崗岩	

表1 大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔（1）

番号	所在地	西暦	銘文	石材	備考
47	桜井市南音羽 観音寺			流紋岩質 溶結凝灰岩	隅飾上端欠損
48	樅原市葛本町西垣内 安楽寺			花崗岩	露盤まで一石で造り出す。実見できず。
49	明日香村岡 岡寺	1360	竜蓋寺/如法経奉納/延文五年十一月廿日 / (二行判読不能)	花崗岩	奉納孔あり
50	明日香村上居 上宮寺1			花崗岩	
51	明日香村上居 上宮寺2			花崗岩	塔身盃難
52	明日香村上居 上宮寺3			花崗岩	塔身盃難
53	明日香村冬野 煙神社	1298	妙金寺 永仁六戊戌 滝正蓮/滝重嚴/ 如法塔 正月日起立 滝乘觀	花崗岩	福澤邦夫氏計測値を使用
54	高取町上小島別所 観音院	1263	弘長參癸亥/勸進僧法心/三月廿三日	花崗岩	露盤二区格狭間、矢穴あり。笠上は 3段+3段
55	高取町壺阪 壺阪寺			花崗岩	
56	王寺町本町二丁目 達磨寺			凝灰岩	本堂基壇内石室より出土
57	広陵町広瀬田中 与楽寺			花崗岩	池中のため計測できず。計測値は濱 田・三木1990より
58	広陵町箸尾 教行寺			花崗岩	笠のみ
59	宇陀市櫻原町赤瀬 千福寺			花崗岩	
60	宇陀市室生村 室生寺			流紋岩質 溶結凝灰岩	伝北畠親房塔
61	吉野町山口 薬師寺	1278	父母師長/往生安樂/建治四年/願主口□	流紋岩質 溶結凝灰岩	笠と基礎のみ
62	吉野町 茄子田			花崗岩	伝村上義光の墓
63	十津川村折立 墓の藪の石塔				9基の宝篋印塔

表2 大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔（2）

3群は、高さ指数に関して見ると2群とほぼ同じであるが、隅飾占有率が50～65%前後を占めるものである。

王寺町達磨寺塔（56）は本堂基壇内石室から出土した舍利奉納用の塔である（図4）（王寺町教育委員会ほか2005）。全ての領域から外れるが、これは奉納用の特殊品として今回の検討からは外したい。

### 隅飾の輪郭

隅飾には輪郭巻のものと、素面のものがある。これらも隅飾グループと相関関係を持つことから、類型の属性とした。これに対し、弧数は隅飾形状と相関関係がなく、また分布にも大きな傾向が見られないことから扱わない。

### 石材の構成

通常大和の宝篋印塔は相輪と笠、塔身、基礎をそれぞれ一石で成形することを基本とするが、笠上下と基礎上をそれぞれ別石で造り出すものがある（本書の主題である大和郡山市額安寺塔が典型例）。こうした別石造りの物の中には笠上を軒上面もしくは数段目を分割し別石にするものと、軒下面で段形を別石にするものがある。また、上宮寺塔2（51）のように笠は一石で成形するが、基礎上面のみ別石で成形するものがある。

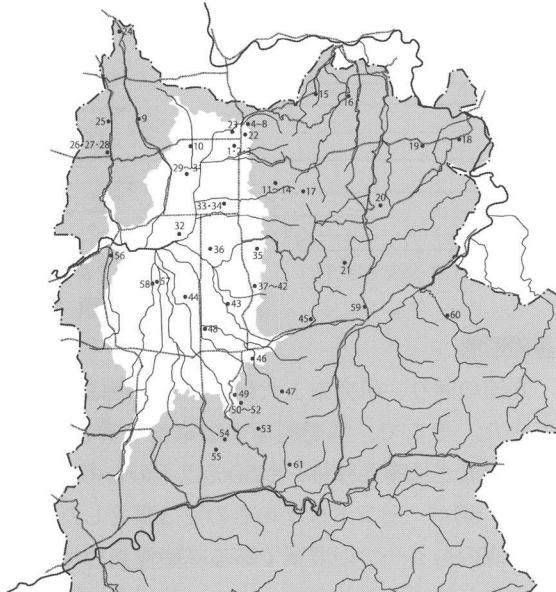


図1 宝篋印塔の分布

高さ指数(高さ÷基底幅)

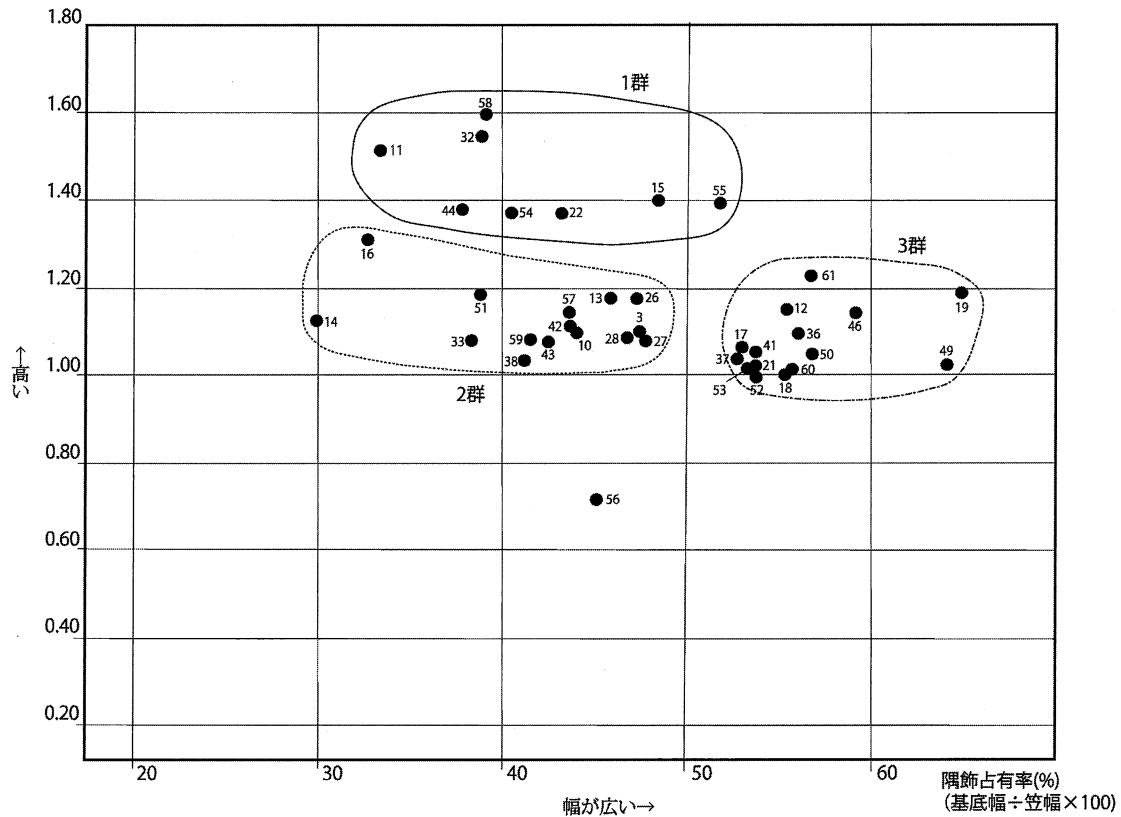


図2 隅飾法量分布

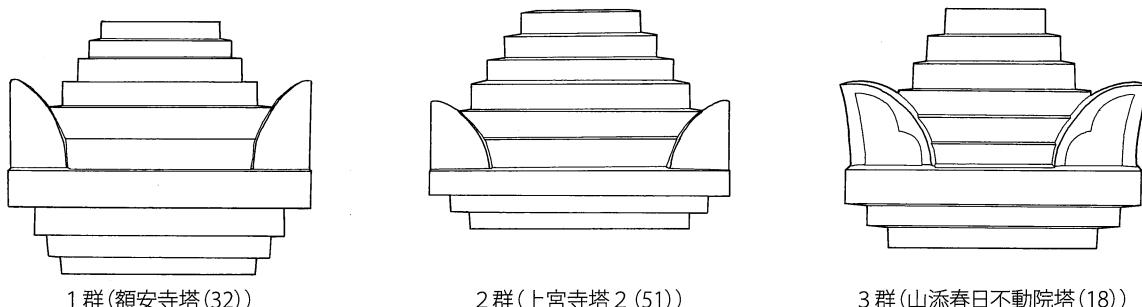


図3 隅飾の分類 (笠幅を合わせて任意変倍)

### 基礎形態

先述の通り、研究史上大和の宝篋印塔は基礎が高いことを特長とされてきた。そこで、基礎側面の縦横比を算出し、幅に対する高さの比率（基礎高さ比率と呼称）が50%以下のものを1群、50～60%のものを2群、60パーセント以上のものを3群とした。ちなみに、大和の宝篋印塔基礎のもう一つの要素である基礎側面の加飾の有無については、8例に加飾が認められたほか、山中に若干多いものの奈良盆地内にも生駒地域にも認められ、その有無に特定の傾向を見出せなかった。

図4 王寺町達磨寺塔  
(S:1/20) [報文よりトレース]

### (3)分類 (表3)

上記属性に注目し、大和の宝篋印塔を3類7小類に分類する。

#### 1類

1-A類 隅飾1群で、笠上若しくは笠下の段形を複数石で製作するもの。高取町壺阪寺塔（55）

分類	番号	名称	西暦	笠	基礎	隅飾			基礎 法量
				別石造り	段別石	輪郭巻	素面	分類	
1-A類 (隅飾1群で 笠を複数石 で製作)	15	奈良市 神宮寺		●	●	●	●	1	1
	32	大和郡山市 頤安寺	1260	●	●	●	●	1	1
	11	奈良市 正暦寺1 (中央塔)		●		●	●	1	1
	22	奈良市 奈良国立博物館		●		●	●	1	1
	54	高取町 観音院	1263	●	●	●	●	1	2
	55	高取町 壺阪寺		●	●	●		1	
1-B類 (隅飾1群で 笠一石造り)	44	田原本町 蓮休寺			?	●		1	
	58	広陵町 教行寺			?	●		1	
2-A類 (隅飾2類で 笠・基礎を 複数石で製 作)	10	奈良市 唐招提寺	1263?	●	●	●		2	1
	51	明日香村 上宮寺2			●	●		2	1
2-B類 (隅飾2群で 笠一石で製 作、隅飾り に輪郭無)	33	天理市 王墓山東塔				●		2	1
	27	生駒市 円福寺南塔				●		2	1
	26	生駒市 円福寺北塔	1293			●		3	2
	38	天理市 長岳寺境内1				●		2	2
	28	生駒市 輿山往生院	1259			●		2	2
	57	広陵町 与楽寺				●		2	2
	43	田原本町 净福寺				●		2	3
	42	天理市 長岳寺墓地3				●		2	3
	59	宇陀市 千福寺				●		2	3
	14	奈良市 正暦寺5 (部材)				●		2	
	16	奈良市 南明寺				●?		2	1
2-C類 (隅飾2群で 笠一石で製 作、隅飾り に輪郭巻き)	3	奈良市 小塔院			●			2	3
	13	奈良市 正暦寺3 (西塔)			●			2	3
	47	桜井市 観音寺			●		2?	2	
3-A類 (隅飾3群で 笠一石で製 作、隅飾り 輪郭無)	61	吉野町 薬師寺	1278			●		3	2
	53	明日香村 灑神社	1298			●		3	3
	19	山添村 大塩墓地				●		3	3
	36	天理市 三十八柱神社				●		3	3
	41	天理市 長岳寺墓地2				●		3	?
3-B類 (隅飾3群で 笠一石で製 作、隅飾り 輪郭巻き)	21	奈良市 青竜寺				●		3	2
	46	桜井市 上之宮				●		3	2
	17	奈良市 日吉神社				●		3	2
	37	天理市 長岳寺大師堂東1				●		3	3
	49	明日香村 岡寺	1360			●		3	3
	60	宇陀市 室生寺				●		3	3
	12	奈良市 正暦寺2 (東塔)				●		3	3
	50	明日香村 上宮寺1				●		3	3
	18	山添村 不動院	1317			●		3	3
	52	明日香村 上宮寺3				●		3	3

表3 宝篋印塔の分類

以外は全て笠幅70cm以上の大型塔で、隅飾に輪郭は持たない。基礎は高取町観音院塔(54)以外1群である。

1-B類 隅飾1群で、笠上若しくは笠下の段形を一石で製作するもの。大きさは様々である。隅飾に輪郭は持たない。笠のみの資料のため、基礎上が一石であるか複数材であるかは詳らかでない。

## 2類

2-A類 隅飾2群で笠上下もしくは基礎上段形を別石で製作するもの。隅飾に輪郭は持たない。基礎は1群である。

2-B類 隅飾2群で笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作する。隅飾に輪郭は持たない。基礎は1～3群各種が存在する。

2-C類 2-B類と同じ属性を持つが、隅飾輪郭巻である点が異なる。また基礎は3群である。

### 3類

3-A類 隅飾3群で笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作する。隅飾は輪郭を持たない。基礎は吉野町山口薬師寺(61)を除き3群である。

3-B類 3-A類と同じ属性を持つが、隅飾輪郭巻である点が異なる。基礎は3群を主体とし、これに2群が混じる。

#### (4)各分類の年代と分布

##### 1類

1-A類宝篋印塔は部材の分割方法などにバリエーションはあるものの、隅飾形態、分割製作技法、基礎法量などに強いまとまりが見られる。有記年銘資料は大和郡山市額安寺塔(32)・高取町觀音院塔(54)ともに1260年代前半のものであり、1260年代を前後する、大和における出現期の宝篋印塔群と考える。笠が一石製作になる1-B類は1-A類に後出する可能性がある。田原本町蓮休寺塔(44)は露盤2区格狭間入りで、笠上は5段と少ないが、軒下3段であり、全体として額安寺塔と同じ設計とみなせ、大蔵派の関与が疑われる(濱田・三木1990)。これを是とした場合、本塔の年代は大蔵派が関東へ移動した最初の資料である箱根山宝篋印塔(永仁4年[1296])以前のものと考えられよう。

1-A類の分布は、高取町觀音院塔、壺阪寺塔を除くとほぼ奈良盆地北部に限定できる(図5)。これに本来1-A類宝篋印塔を構成していた可能性が高い段形部材の分布を加えると<sup>3</sup>、奈良盆地北部の偏在性がさらに明瞭となる。その所在地は、本来の位置が不明確な奈良国立博物館塔(22)を除外しても南都諸寺院との関係の深い場所に所在するといえる<sup>4</sup>。

ところで、ここで問題となるのが高取町壺阪寺塔(55)(図6)である。本塔について、川勝政太郎はこれを鎌倉時代中期と位置付け、笠下3段の方式が神奈川県箱根山宝篋印塔に見られることから、大蔵安氏が「この地方の手法を関東へ持つて行ったことが考えられる」とする(川勝1966)。三木治子はこれをさらに発展させ、別石反花座に注目し、壺阪寺塔が大蔵派最古の遺品と考える(三木1986)。これに対して、古川久雄は、壺阪寺塔が大和に例を見ないタイプのものであることと、同塔が京都に存在する隅飾3弧・輪郭付、基礎上別石反花座などの特徴を持つ、京都の宝篋印塔(古川の設定する「誠心院型」宝篋印塔)に類似することから、壺阪寺塔も誠心院型宝篋印塔の一種であるとしたうえで、その年代観を、京都における誠心院型宝篋印塔に若干先行する13世紀末から14世紀初頭と考えた(古川2001)。

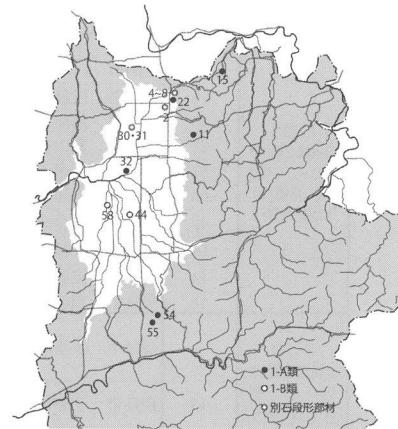


図5 1類宝篋印塔の分布



図6 高取町壺阪寺塔

輪郭付、基礎上別石反花座などの特徴を持つ、京都の宝篋印塔(古川の設定する「誠心院型」宝篋印塔)に類似することから、壺阪寺塔も誠心院型宝篋印塔の一種であるとしたうえで、その年代観を、京都における誠心院型宝篋印塔に若干先行する13世紀末から14世紀初頭と考えた(古川2001)。壺阪寺塔隅飾は別石造3弧輪郭巻で法量1群の形態を持つが、この形態は別石造という手

法ともども大和に類例がない。さらに、基礎上に反花を置くことは奈良国立博物館塔、高取町觀音院塔や生駒市円福寺南塔（27）などにも見られるが、高さが高く、垂れ下るような形態の反花は類例がない上に、弁央が四隅に配される形態もほとんど類例をみない。そして、何よりも壇阪寺塔の諸属性が、一つとしてその後の大和の宝篋印塔に引き継がれていない。このことから、筆者は古川の指摘するように、壇阪寺塔は京都からの搬入、もしくは京都系石工の出作であると考える。

## 2類

2-A類は、1類の亜種という位置付けを行うべきかもしれないが、隅飾形状を重視する今回の区分上は2類に編入しておく。2-A類の代表である奈良市唐招提寺塔（10）は隅飾の形態以外は1-A類と同じ要素を有し、軒直上で分割する方法は1-A類である奈良市須川神宮寺塔や奈良国立博物館塔（図7）と同じである。笠幅も基礎側面面積もこれらの塔は酷似し、同じ工人によるものではないかとさえ思わせる。桃崎祐輔は唐招提寺塔について、唐招提寺開山鑑真和上（763年没）の五百回遠忌塔ではないかと考えるが（桃崎2000）、筆者も賛同したい。これに対し、明日香村上宮塔2（51）は笠を一石で製作し、基礎上段形のみ別石製作することから、1-B類と同様の時期のものと考える。

2-B類は、有記年銘資料では1259年銘の生駒市興山往生院塔（28）、1293年銘生駒市円福寺北塔（26）があり、かなりの時期幅を持つ。今後細分の余地があろう。

2-C類は有記年銘最古の資料が、弘安10年（1287）の京都府相楽郡和束町湯船熊野神社跡塔である<sup>5</sup>。湯船塔は基礎2群であり、2-C類の中でも古いものである可能性が考えられることから、2-C類の年代を13世紀第4四半期以降としておきたい。

2類の分布を見ると、宇陀市千福寺塔（59）を除くと、奈良盆地およびその縁辺に集中する（図8）。奈良市南明寺（16）は神宮寺同様南都の別所的存在であり、影響圏内と言える。

## 3群

3-A類は、現在残存する最古の資料が吉野町山口薬師寺塔（1278年）（図9）となる。ただ、山口薬師寺塔は、これに続くものが明日香村畠神社塔（53:1298年）となり、年代的にかなり開きがある。また、山口薬師寺塔は今回の分析方法では3類に当てはめざるを得ないが、笠上端を屋根形にする点や、同時期の大和の宝篋印塔が大型塔で占められるのに対し小型塔であるなど違和感が多く、現段階では3-A類の初現という評価は保留したい<sup>6</sup>。3-A類の年代については、2-C類と同じ13世紀末～14世紀前半頃を想定したい。

3-B類の有記年銘資料は山添村不動院塔（18:1317年）が最古である。本塔は基礎が3群であり、これに対し2群基礎を持つグループがあることから、その出現は若干遅る可能性が考えられる。いずれにしても14世紀代のものと言えよう。

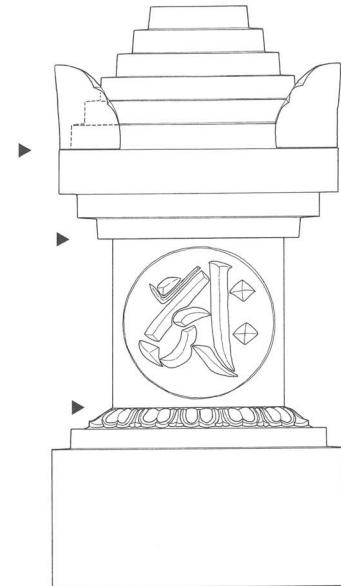


図7 奈良国立博物館塔 [◀で分割] (S: 1/20) (岡本広義氏原図を筆者トレース)

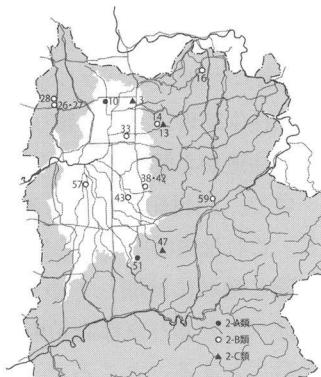


図8 2類宝篋印塔の分布

3類の分布はそれまでの1・2類とは大きく異なり、東山中を中心とする（図10）。つまり3類は大和において客体的存在であると言えよう。

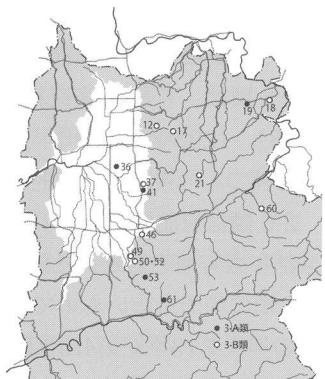
#### (5) 大和における宝篋印塔の展開

以上、大和における宝篋印塔の分類とその年代、分布を概観した。その成果を纏めると、大和においては主に1260年代を中心とした時期に1類宝篋印塔が作られる。その分布は主に大和北部、とりわけ南都の強い影響下で出現すると考えられる。また、同時期に2類宝篋印塔も出現する。1類宝篋印塔はその後広く展開することなく、1290年代後半までには廃れてしまい、2類宝篋印塔が奈良盆地全域に展開する事になる。つまり、大和の宝篋印塔のスタンダードは生駒市輿山往生院塔（図11）を嚆矢とする2群宝篋印塔ということになる。ところで、輿山往生院塔は笠・塔身・基礎をそれぞれ一石で製作し、隅飾は小さく素面、基礎は高いという、同時期の1群宝篋印塔とは形態も成形方法も大きく異なった、革新的なデザインで出現する。これまで当該期の革新的デザインとしては大藏安清による大和郡山市額安寺塔が評価されてきたが、額安寺宝篋印塔は全体の形状及び石材の組み方では従来の大和の規範を維持しており、デザイン面で革新的であった。これに対し、輿山往生院塔はデザインだけでなく石材の組み方でも革新的であり、大藏安清に勝るとも劣らない革新性を持った塔と言える。さらに、額安寺塔が忍性配下で関東のスタンダードを作り上げる事になったのに対し、輿山往生院塔は大和に残り、大和のスタンダードをつくってゆくことも注意が必要である<sup>7</sup>。

さて、13世紀後半になると隅飾大ぶりな3類宝篋印塔が出現する。これは東山中を中心に分布し、その後隅飾輪郭巻を持つ3-B類が同じ地域に展開してゆく。この隅飾輪郭巻という要素は、先にも述べたとおり京都府和束町湯船熊野神社跡宝篋印塔（1287年）を最古とする。ところで、この塔のすぐ横には基礎と笠の残欠が存在し、そこには石工として「行長」の銘がある。この行長は長野県飯田市文永寺五輪塔および石屋形を製作した「菅原行長」と同一人物とみなせ、この基礎と同じ石材で作られる笠石の隅飾には輪郭巻がみられる。このことから、隅飾輪郭巻という要素が、13世紀後半の南都石工にも採用されていたことは確実である。しかしながら、南都においては奈良の中心地である奈良市小塔院塔（3:2-C類）にすでに採用されるものの、南都や奈良盆地に広まった様子ではなく、鎌倉～南北朝期を通して客体的存在である<sup>8</sup>。むしろこの要素は近江地域で積極的に展開し、古くは正応4年（1291）銘を持つ滋賀県八日市市正壽寺塔にすでにみられる。この塔は隅飾占有率が61%、高さ指数が1.21と、3群の形態を持つ。近江地域の宝篋印塔はほとんどが隅飾占有率60～70%と、3群、いわゆる「大ぶりな隅飾」を持ち、輪郭巻である。こうした近江系の要素は伊賀地域へも波及しており<sup>9</sup>、大和において3類が東山中を中心に分布し、隅飾輪郭巻もまた同様の分布を示すことは、13世紀末～14世紀に大和東山中で宝篋印塔造立が開始された際に、主に伊賀地域からこれら



図9 吉野町薬師寺塔



の要素が波及したことを示すと言えよう。

#### おわりに

以上、大和における鎌倉～南北朝期の宝篋印塔の様相について概観した。本稿では、1260年代前後に大和で宝篋印塔の造立が始まり、当初は隅飾が高く、基礎および笠を複数部材で構成する1類塔と、隅飾が素面で小さく、基礎の高い2類塔が並存、13世紀後半までに2類塔が独占するようになり。これが大和を代表する宝篋印塔であることを明らかにした。さらにその嚆矢となる興山往生院塔の重要性にも触れた。また、隅飾の大きい3類宝篋印塔が、大和では13世紀末～14世紀にかけて、主に伊賀地方からの影響で東山中を中心として展開することを確認した。

この他にも語り残したことは多い。例えば従来大藏派の特徴とされてきた、露盤の2区格狭間が都祁村青竜寺塔（21）にみられ、塔身の二重輪郭巻も宇陀市室生寺塔（60）に見られるなど

（図12）、大藏派の記憶とも言うべきものが、3類宝篋印塔の中に散在していることも今後注意が必要である。また3類と伊賀・近江との関係に関連して、奈良正暦寺塔2（12）の隅飾に、壺阪寺塔を除くと大和では唯一ともいえる月輪による加飾が見られること（図13）なども検討の余地がある。

さらに、奈良市正暦寺や、天理市長岳寺などに複数類型の宝篋印塔が見られる。これらの寺院はいずれも中世興福寺と深いかかわりのあった寺院で、また、修驗とのかかわりの深い寺院でもあった（追塩1995）。すでに山川均が指摘するように（山川2008）、宝篋印塔と修驗に何らかの関係が見出せるとすると、こうした地に多種多様な宝篋印塔が造立される背景もまたそうした広域に移動する宗教者の介在を考えることができるかもしれない。再度検討を試みたい。

最後に感想だが、今回の検討に際して各地の宝篋印塔を調査したところ、「盗まれた」ものが複数あった。路傍の石塔とはいえ、貴重な文化財であり、大切な信仰対象である。これらの管理を強めることもその対処法ではあるが、管理を強めるとモノが市民から離れていってしまう。地域の方々に文化財としての石塔、その重要性・歴史性を知ってもらい、地域で保護・管理していただくこともまた重要なのではないだろうか。

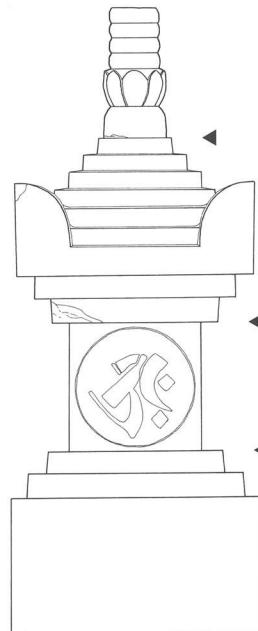


図11 生駒市興山往生院塔[◀で分割]  
(S:1/30 銘文略)(福澤邦夫氏原図を筆者トレース)



図12 宇陀市室生寺塔



図13 奈良市正暦寺塔2

(文責：佐藤亜聖)

<sup>1</sup> できるだけ現物の確認・計測を行う事を心がけた。ただし、橿原市安楽寺塔（48）は調査できず、山添村壇の山塔（20）、生駒市南条塔（25）、奈良市某美大学生寮塔（23）はそれぞれ分析に耐えうる資料のはずであったが、位置を確認できなかつた。また、天理市神縄池畔塔（35）は盜難により現物を確認できなかつた。その他、広陵町与樂寺塔（57）、奈良国立博物館塔（22）、天理市王墓山東西塔（33・34）など立地上調査ができなかつた塔については、現地にて確認の後、文献等より数値をいただいた。

<sup>2</sup> このほか、三重県伊賀市阿山町穴石神社前に隅飾占有率34%、高さ比率1.3のものがあり、このタイプのものは今後資料数が増加することが予想される。

<sup>3</sup> 奈良市三笠靈園塔（4～8）は3基分の宝篋印塔部材と考えられ、そのうち（8）は奈良市唐招提寺塔や奈良市須川神宮寺塔・奈良国立博物館塔と同じく軒直上で分割し、笠下3段にするものと考えられる。これらの石塔が所在する三笠靈園は伴寺と呼ばれる寺院の推定地であり、本来伴墓と呼ばれる東大寺系僧侶の墓地であったと考えられる。ちなみに本部材のすぐ横には、もともと俊乗堂の隣にあった、重源の墓として著名な三角五輪塔が存在する。また、大和郡山市郡山城天守台には2基分と思われる部材が存在するが（30・31）、多聞院日記天正十六年（1588）正月廿五日条には郡山城の改築に際し、おびただしい量の石材が奈良から搬入されたとあり、本部材も奈良からの搬入が考えられる。なお、天守閣以外に柳沢文庫庭にも段形部材が存在するようだが（南村1975）、調査が及ばなかつたため一覧に記載していない。

<sup>4</sup> 大和北東部の山中にも、奈良市須川神宮寺塔（15）などが見られる。神宮寺塔は本来須川薬師寺（廃寺）に所在したものであるが（『奈良市史』（社寺編））須川は奈良から笠置に抜ける重要なルートに面している。奈良時代以降巡峯道場として鹿野園、誓多林、大慈山、忍辱山、茗荷などが設けられており、この地域から解脱上人貞慶で著名な笠置寺、小田原別所の存在した岩船寺・淨瑠璃寺付近などにかけての範囲は、南都の別所群が散在する、興福寺の強い影響下に置かれていた地域であった。

<sup>5</sup> 湯船熊野神社跡塔は隅飾基底幅占有率が46%、高さ指数が1.26、基礎高さ比率は0.557である。

<sup>6</sup> 吉野町山口薬師寺塔は笠上最上段を小さく屋根形に作り出す。この形態は天理市王墓山東西塔、同市長岳寺墓地塔2（41）に類例があり、これらを別のグループに纏めるべきかもしれない。検討の余地を残しておきたい。

<sup>7</sup> 山川均は生駒地域における律宗とりわけ忍性の活動を重視し、当該地域で後に伊行氏が活動することから、生駒市輿山往生院塔の作者を伊行吉と考える（山川2006）。大蔵派に対置できるスタンダードを築く石工としては、やはり筆者も伊派の可能性を考えたい。

<sup>8</sup> この点について、山川均氏は行長が伊派に連なるものであるが、傍流であったため「菅原」を名乗ったと考える（山川2008）。輪郭巻が大和へ進出できない理由もこの辺りにあったのであろうか。

<sup>9</sup>もちろん伊賀地域は伊派石工銘の石造物が複数あり、註2に述べたように2-B類宝篋印塔も確認でき、本来大和石工の勢力圏である。しかし、悉皆的に調査していないものの、数量的には隅飾輪郭巻の2-C類（例、伊賀市西光寺塔・若王子跡等など）、3-B類（例、伊賀市穴石神社塔（1359年）、同市松栄寺塔など）が卓越していると考えられる。大和系石工が近江地域の強い影響下、独自の地域色を生み出していたと考えられる。